有名キャラ官能小説ＣＧ集第４０９弾！！

僕は怪しいスライムだよ♥

転生したらスライムだ○た件

はぁはぁＣＧ集

Win 対応 | Mac 対応 | 1.6MB Memory | 1024×768 32bit Color | マウス対応 | キーボード対応 | CD-R

成年向

『ふんほ、っふんほ、ふんっ、ハァハァ…アリスたんのまんこ、サイコーだおっ』

「うう…き、気持ち悪いんだけどぉっ？！　感想とか言わなくていいから、早く終わってよぉっ」

なぜこんな事になってしまったのか、アリス・ロンドは未だに訳が分からないと頭を抱えたい気分でいっぱいだった。
その股間には、無駄に巨大なデカチンが深く挿入れられ、ズッコズッコと軽妙な動きを続けている。

「はぁ、はぁ…んっ、…う…おなか…、なんだか、おも…い…っ、感じが…するの」

『もうちょっとだから！　あとほんのちょびっとだから！
大丈夫、クロエちゃんのオマンコに、ちょこっと種付けするだけだからねぇっ』

正直、お腹の中は気持ちが悪いし苦しい。
けれど、これで死の運命から救われるというのであれば――――
クロエも納得いかないものを感じてはいるものの、その巨大ペニスを拒絶する事はなかった。

『あーもう、無駄に長いのよアンタたちはっ！！　いーからさっさとぶちまけてやんなさいっての！！』

怒りをぶちまけながら、ペニスにのっかってるラミリスは、
肉竿に抱きつくようにして全身で擦っている。

彼女も顔をゆがめる相手――――おじさん精霊。
しかも、事もあろうに多人数が召喚されてしまった。
だが彼らは非常に便利で、胎内に中出し射精されれば、簡単に精霊が宿るという超お手軽便利な相手だった。

「はぁ、はぁ…、い、一体いつまでこうやってれば…いいっていうの！？　私もう疲れてきたのにっ」

疲労からアリスが不満をぶちまけると、おじさん精霊は申し訳ないと眉をひそめる。

『ごめんねぇアリスたぁん。フーフーッ、アリスたんがつぅいカワイイからおじさん、ちょっと長々と楽しんじゃったよぉ。
でももう大丈夫…おじさんの子種でアリスたんを孕ませて、助けてあげるからねぇっ！』

ドギュッ！！　ドグヂュグルルルッ！！　ドグッドヂュンッ！！！

「ひやああ！！？　な、なに？？　お、お腹の中からなんか…し、染みてくるんだけどぉっ？？？！」

胎内に射精されたおじさん精子は、わーっと散開して子宮壁にたどり着く。
するとそこから二人の体にしみこみ、全身の細胞を侵していく。

「…身体、あつい……はぁ、はぁ…ヘンな、感じ…」

『さー、クロエちゃん。この調子でどんどん種付けしていくよぉー。
あと１０回も繰り返せば、完璧におじさんの精子が馴染んで、魔素が完璧に安定しちゃうから、一緒に頑張ろう！』

最終的には、確かに彼女達は助かる事となる。
だが、その代価として、二人はイケナイ快感をその身で覚え込まされてしまった。

閉じる

「いやぁんっ、もーすっごい腰ふって…あんっ、お腹の中かきまわされちゃってますっ♪」

テンペストに新たに移住してきたエルフ達やミリムを歓迎すると称した男達の企み。
だが女達はその上をいっていた。

「クス、そこでおしまいかしら？　まだ先がありますよ、意外と紳士なんですね、フフフ」

乱暴にしてはならないと気遣う男のチンポは、
少しミステリアスなエルフの膣の８割程度しか攻略できていない。
だがエルフの子宮口は、既にやんわりと開かれている――――
不意に奥まで突っ込まれたならば、子宮内にまで咥え込んで離さない気満々だった。

「そんな緩い動きで良いのか？　その程度の突き、ワタシには攻撃にすらならんぞ。
遠慮はいいから全力でくるのだ、ワハハッ♪」

一番不満があるのはミリムだ。
見た目には華奢で小柄な彼女の身体は、
３０ｃｍ級のペニスを挿入したならばその先端はヘソの内側を貫通しかねない体躯。
さすがの男達も、そんな相手に思いっきり犯し込む事はできないし、
一応は嘘ついてヤってる手前、後が怖いという心理的なものも手伝い、思い切った腰使いが出来ずにいた。

「ええい、それではラチがあかんだろう。こうやるのだ！！」

だが、焦れたミリムが自らペニスを迎えに行く。
膣の浅い部分でマゴついていた肉棒は、その頭を一気に彼女の子宮にしゃぶられる位置までハマる。
そして、もう二度と放さんとばかりに子宮口が亀頭のカリ下でガッチリと閉まると、
ヴァギナ全体でペニスを奥へ手前へと動かしはじめた。

「うわはははっ、どうだー？　ワタシのマンコは最高だろー。
遠慮せずどんどんイってよいのだぞ、すべて飲み干してやるのだ☆」

華奢であるからこそ締まりがいいのか、はたまた気が遠くなるような長い年月を生きてきた経験か。
ミリムの穴は強烈な名器だった。浅はかなる男達がこれに耐える事など到底できず…

ドグッ！　グブッ、ゴグッ！！　ゴブッゴグンッ！！！

彼女の子宮に、ありったけのザーメンをどんどん吸い出され、一方的に飲み込まれていくばかりだった。

閉じる

子孫———それは、いずこの世界、どこの国でも繁栄に必要不可欠なものだ。
まして、国のトップともなればよりなおさら重大事である。
「お、おやめくださいっ、あぁ！　…わ、私はその…はぁはぁ、そこは、よ…弱いんですっ…」
ソーカがまだ少し抵抗気味に、身もだえる。
既にその胎内は、
ペニスの先端が膨らんで一部がスライム状に戻ったもので埋め尽くされている。
懐妊は避けられない状況…それでもまだ２割くらいはソウエイを想って、気持ちが受け止めきれないのだろう。
ブククブクッ！！　グブブブブッ！　グブゥッ！！！
「はぁ、はぁ…このようにたくさん…はぁ、はぁ、ありがとうございますリムル様♪」
至極幸せそうに満面の笑みをみせるシュナ。
だが彼女の胎に入ったのは疑似的に生成した精子…だけではない。
<<個体名：シュナ の卵子を捕獲しました。リムルの情報の一部を結合し、受精卵を作成しますか？>>
「（もちろんＹＥＳだ！）」
そう、シュナの子宮の中も、隅々までリムルのペニスの先から膨らんだスライムで埋め尽くされている。
理由は簡単。
彼女らの卵子を確実に捕獲し、受精卵に変えたうえで胎内の最適な壁面に着床させるためである。

妊娠率１００％———
それは子作りに折れたリムルが、毎日のように搾られる事になるのを回避するため、
一度で目的を達するべく考えたセックス方法であった。
「ハァハァ、リムルさま！　あぁ、もっとですもっとっ、もっと私の中にっ！！
この胸の大きさが霞んで見えるくらいにもっとぉ！！」
完全にスイッチが入ったシオンは、
胎内に入ったスライム部分の量で既に子宮が従来の３倍程度に膨らんでいるにも関わらず、
なお求めて止まない。
ヨダレを垂らし、爆裂的なバストをバルンバルン揺らし、獣欲に支配された瞳で求め続けていた。
「すごいなシオン…。内側から腹が圧迫されてしんどいだろーに」
「いいえ、これしきのこと！　むしろまったく足りませんから！
ハァハァ、ですからもっと、私の中をリムルさまで埋め尽くしていただきたいのですっ」
分身しているとはいえ、言ってしまえば分身体の体積分を最大量として胎内に挿入れる事はできる。
だが、あくまで子宮を埋め尽くすのは卵子捕獲のためであって、量を増しても増さなくても１００％孕む事に変わりはない。
「…ま、いっか…シオンがそれで満足するなら。んじゃいくぞー！」
ドボドボドゴボドゴボドゴボゴボゴボォッ！！！

・

・

・

「…いい。それは凄くいいアイデアではないですか！」
「ええ、素敵な提案です！　確かに今まで、どうして思い至らなかったのでしょう？」
ようやく妄想から現実に返ってきたシオンとシュナが紅潮と喜悦と共にソーカに向かって身を乗り出した。
リムルのいないところで、シオンとシュナのリムルを巡る女の戦いが勃発していたところへ、
通りがかったソーカが見かねて仲裁のつもりで一言発したのが全ての始まりとなる。
すなわち、
———テンペストという国の長なのだから妻が何人もいてもおかしくないのでは？　争うのは意味のない事でしょう———
と。
だがそれは、言い換えれば火花を散らしていた二人がタッグを組んで、今度はリムルに迫る事態となる事を、
ソーカは思い至っていなかった。

閉じる

ビュクビュクッ！　ビュルルルルルッ！！！

「んんんっ！　あ、熱いです…っ、はぁはぁ、また…このようにたくさん…ふぅ、ふぅ…」

シュナは軽くのぼせたように上体をフラつかせる。
それでも頭の中は、胎内に撃ち込まれたゴブリンの精子が、
どうか根付きませぬようにという願いでいっぱいだった。

『これからは、種族の発展繁栄も考えないとダメだって事で、お二人にも協力してほしいッス』

ゴブタの要請を受け、シュナとシオンはゴブリン達との繁殖行動を強いられていた。
曰く――――
丸１日、オスのゴブリン達と子作りに励むこと。
もしそれで妊娠した場合、ゴブリンの嫁となってゴブリン族の繁栄に生涯付き合うこと。
『あ、もちろん洗っちゃダメっスよ？　今日を終えたら丸１週間は、このフタをアソコに挿しておいてくださいっス』
その結果、妊娠していなければＯＫで、テンペストに住んでいる次の種族と励む。
そうやって全ての種と交わり、妊娠さえしなければあとは自由…、という話であった。
「はぁ、はぁっはぁ、クッ…でしたら、ふぅふぅ、このお尻の方に挿入れる理由は…意味はあるのですかっ？！」
シオンが憤りながら問うが、むしろその方が彼女達には好都合だという事には気づかないらしい。

ゴブタの話は、ヤりたいがための真っ赤な嘘、
あわよくば本当に妊娠させて、この先もずっとヤりたい放題に…という邪な欲望がつかせたものだ。
なのでシュナとシオンからすれば、身籠らないで彼らの精力を空にしてしまうのが最適解である。
しかし――――
「（うう、なんでしょう？　このお尻をズボズボされる感覚…）」
シオンは、アナルファックに快感を感じつつあった。
連動してマンコも締まり、その巨大な乳房もより大きく揺れるようになってゆく。
「くうう！！　うっ、あっ…んんっ、はぁはぁっ、こ、この程度…わ、私にはなんという事は――っ！」
ドグドグドウドクッドビュルルッ！！！　ドクンッドクッドウッ！！！
乳首が乳輪を持ち上げるように伸び上がった。
シオンの瞳がググッと上に上がる。
膣と直腸の壁がキュウキュウと締まってゴブリンチンポから子種を搾り出す。
そう、ここで妊娠しなくても良いのだ。
二人を快楽に漬けて堕としてしまってもゴブタ達の勝ちになる。
そして二人は知らなかった。ゴブリンの精力が、想像以上に絶倫極まりないという事実を……

閉じる

始まりはそう、些細な事であった。

「んぁっ、はぁ、はあっ！　んっ、ちょ、ちょっと待て待て、い、いくらなんでもこれはさすがにっぃ」

まだ幼い少年たちが、異性の保護者に甘えたがる気持ちを抱いてもおかしくはない……

心のケアも重要だと思い、シズさんに化けて慰めてやったのが、そもそもの間違いだった。

「へっへ、なんだよ先生っ。もーギブかっ？　オレはまだまだヤり足りないんだぜっ」

ケンヤがペニスを差し出してくる。射精したばかりのはずなのに、不相応にご立派なままだ。

「そ、そういう事じゃなくてだな！　はーはー、こ、こんな事をさせてやるだなんて、こっちは一言も――――」

シズさんに完璧に寄せた女性姿で、ただ彼らの頭を撫でたり膝枕したりして、

のんびりとくつろいでいたはずが、ついウトウトし、

そして気づけば寝ているうちに思いっきりヤられていた。

「はは、隙ありですよ、先生！」

ゲイルのチンポがマンコにハメられた瞬間、頭の中が焼けたような気がした。

少年たちの中でも、体躯に優れているとは思っていたが、そのイチモツはことさら立派だ。

リムル最大の過ちは、シズさんに化けるにあたり、”完璧すぎた“こと。

外見だけじゃなく、性器までバッチリ再現していた事を、当の本人も気付いていなかった。

「ぐうっ！！　あっ、あっ…こ、ら…こ、腰を動かしちゃ…んっ、ふぁっ、んくっあっあっ！？！」

「ダメだっていうわりに先生、……気持ちよさそうに喘いでますよ」

リョウタのツッコミに、顔が熱くなる。

スライムなのだから、すぐにも擬態を解くだけで終了。

もとより性別らしい性別というものはなく、前世が男性であったから男性寄りなカンジで生きてはきた。

だが、高再現度でシズさんに擬態した事でリムルは、女として犯される気持ち良さを実感してしまった。

「き、気持ちいいです先生！　で、出るぅっ！！」

ドビュウウッ！！　ビュグンッビュルルルルッ！！！

「んほぁぁぁああ！！？　な、なん…こ、れ…き、気持ち良すぎ…いっ！！」

<<個体名ゲイル・ギブスンの射精物より、遺伝子を解析、捕食……完了しました>>

こうしてリムルは女性の快感に目覚め、密かにケンヤ達の性欲のはけ口にされるようになっていった…

閉じる

「（お、おい、落ち着けって大賢者！！
…くそっ、ダメか。俺までシズさんの姿で固定しやがって、能力が何にも出せないしっ）」
大量分裂したリムルの内、本体はシズに擬態させられて事実上の一切の能力が封じられ、
分裂リムル全てを大賢者が勝手に操作———そこまではまだいい。
問題は、それらが何をしているのかという事なのだが…
「はぁ、はぁ…はぁっ、リ、リムル様…っ、ああっ、ご、ご乱心はまだ…んんっ、収まらないのですね。
かしこまりました、このシュナ。例えリムル様の御子を身ごもろうとも全て受け止めます……ポッ」
アソコがもはやドロドロに蕩けているシュナ。
中から疑似精製したものだろうと思しきザーメンがドバドバと噴き出している。
「んっ、あっはぁっ、な、なんて力強い…っ、んんんっ、はぁんっ♪♪
す、素敵です、リムルさまっ…もっともっと、私で気持ち良くなってくださいっ！」
シオンもいつもと違う様子のリムルに戸惑いつつも、全面的に受け止める姿勢だ。
いや、むしろ本望と言わんばかりだ。
ビュグビュグドグドグと、中で射精している音がシオンの身体を通し、距離を開けてなお耳に聞こえてくる。

「（だ、大賢者のやつ…どんな量と勢いで射精してるんだ？？？）」
いくら武人とはいえ、ここまで聞こえるほどとなれば膣と子宮を打つその圧力と衝撃は計り知れない。
だが、もっとヤバイ状態が進行している者が隣にいた。
「むう～…リムルぅ…私はもう、種がついてしまっているぞ？　それでもまだ物足りないというのか？
強欲なマブダチなのだ……だが、こうなれば一生私の面倒をみるのだぞ☆」
さらっと爆弾発言。
確かにミリムの見通す目、ミリムアイにかかれば、自身が妊娠しているかどうかなど簡単に見通せるのかもしれない。
そして大賢者のことだ。１００％確信犯かつ手法でもって、ミリムを孕ませたに違いない。
『…最後、あなたの番』
そして恐ろしい事に大賢者は、リムル本体（シズに擬態中）を指して、ヤる気を見せた。
ペニスを近づけ、そして———
「ちょ、ちょっとまて大賢———アーッ！！！」
肉体は女性に擬態しているとはいえ、その心は前世から継続して男性の意識が強いリムル。
ああ、何という事でしょう。
刺されて死んで、生まれ変わった世界で、女性として自分自身に犯された１匹のスライムは、
こうして自分自身の子供を孕まされた上に、可愛い魔王と鬼人の女の子たちを嫁に貰ったのである。

閉じる

『ウメヨ　フヤセヨ…ワレラ ガ ドウホウ…ウメヨ　フヤセヨ…ワレラ ガ ドウホウ…』

まるで何かに取りつかれたように、オーク達は獲得した鬼人の女を犯し続けた。

「はぁ、はぁっ、く…ひ、姫さま…お気を、確か…にっ、おもち…も、って…ぐあああっ！！」

ドヂュルッドギュプッ！！　ドグッドグゥウンッ！！！

巨乳の鬼人が悔しさに吼える。

胎内がカッと熱くなり、オークチンポの引き抜かれたマンコからは、ダラダラと精液が流れ出てきた。

「わ、私のことは…っ、貴女だけでもここを脱し、救援を――――んぐむっ？！」

だが高貴そうな鬼人は、その口にチンポを無理矢理ねじ込まれ、黙らされる。

大股を開かせられ、同じくマンコにも巨大なチンポがぶち込まれた。

「ひ、姫様ーっ！！　…き、貴様ら…この豚どもめぇっ！！」

だが多勢に無勢。いかに個体能力では勝ろうとも、敵の数が多すぎた。

加えて１匹２匹のオークのチンポを、その股間付近の肉ごと引き千切ってみせても、

彼らは一切怯えない。

何かに取りつかれたようにたった一言をひたすら繰り返しながら、二人の鬼人をただただ犯し続けるのみ。

『ウメヨ　フヤセヨ…ワレラ ガ ドウホウ…ウメヨ　フヤセヨ…ワレラ ガ ドウホウ…』

ビュドルルルッ！！　ドクッドクゥッ！！

「くうぅ！！　い、いい加減にしろっ…貴様ら豚の子など誰が身籠るものかっ！！」

・
・
・

『ウメヨ　フヤセヨ…ワレラ ガ ドウホウ…ウメヨ　フヤセヨ…ワレラ ガ ドウホウ…』

グビュッルウッ！！　ビューッビュウウッ！！！

「はぁ、はぁっ、そのように…多量に…されてもっ、はあはぁ…デキは…し、ませんっ…無意味ですっ」

・
・
・

『ウメヨ　フヤセヨ…ワレラ ガ ドウホウ…ウメヨ　フヤセヨ…ワレラ ガ ドウホウ…』
『ウメヨ　フヤセヨ…ワレラ ガ ドウホウ…ウメヨ　フヤセヨ…ワレラ ガ ドウホウ…』
『ウメヨ　フヤセヨ…ワレラ ガ ドウホウ…ウメヨ　フヤセヨ…ワレラ ガ ドウホウ…』

・
・
・

ドグッ！！

ビュルルルルルッ！！！

ドバッ！　ドブシャァ！！！

ビュービュルルッ！　ドクンッドクゥッ！！！

ビチャチャッ、ドブチュルルルッ！！！

・
・
・

二人の言葉も、態度も、抵抗も、状態も…存在の全てが一切おかまいなし。

ただ女がいて、マンコがある。それだけが全て。

オーク達は永久に犯し続ける。

実際に孕んでも止まらない。産んでも止まらない。孕まなくとも止まらない。

その恐怖を二人が知る事になるのか、はたまた気持ちが折れるのが先か…

絶対的な真実はただ一つ、二人の胎内に種付けされ続けるという事のみである。

閉じる

「あかんなーぁ、森の管理者さん。あんま嘗めてもらうんはこうなりますーいう、ええ例ですやん♪」

「ぅ、…はぁ、はぁ…なんという、事を…く…」

中庸道化連の男達によって、トレイニーは見るも無残な姿となっていた。
精霊であるはずの彼女らを捕らえ、その操を穢し、内外に精を浴びせる…そんな事が可能なのか？
我が身をもって体験させられているにもかかわらず、彼女はまだ信じられないといった様子だった。

「おかしーなー思ってるんやろうけど、それはつまり…わてらの事、なーんにも分かってないっちゅー事ですんね
そんなんでよーもまぁ、しつこく追いかけまわしてくれたもんで…」

ラプラスは、愉快愉快と含み笑う。
森の管理者と呼ばれる彼女らは、確かに注意すべき相手ではある。
だが、では彼らがまるで歯が立たない相手かといえば…そうとも限らない。
今までが基本逃げの一手であったのは、関わり合う必要性がなかったからに他ならなかった。

「くううぅ！！　んっ、ぐ…はぁ、はぁ…なんて、深くまで…んううっん！」

「精霊さまの胎ん中にチンポぶち込むんは貴重な経験やからなー。
せっかくの機会や、悪いけどとことん付き合うてもらうでー…クックック」

お尻の穴とマンコに２本挿しは当たり前。
乳房はえぐり取ってしまっても構わないと言わんばかりに乱暴にこねくり回され、
周囲は元気なチンポが無数に囲む。
今、彼女を侵しているイチモツが果てたとしても、代わりが多すぎる――――
このチンポ全てに犯され続けると意識してしまうだけで、彼女は気が遠のきそうな気分だった。

「あっあっ、ううっ！！　ま、また中に…出すおつもりで――――～～～っああ！！」

ドグドグドビュルウッ！！　ブグッウ！　ゴブッドブブゥッ！！

閉じる

「いかがですかなお客人っ、フンッフンッフンッゥ！！」
リグルドはこれでもかと腰を振るう。
加えて、まるで枯れ枝でも握るかのように軽々とエレンの太腿を鷲掴んで彼女の身体を上下させていた。
「いかがじゃっ、ないっ、ですっ、よおっ！　はぐっ、ひぎっ、んいいっ！！」
体躯のいいホブゴブリンの巨大根を無理矢理ねじ込まれ、
彼女のマンコはギチギチに広がっていた。
「あんまり無茶しないで欲しいッス！　ガバマン相手とか気持ち良くないんスから～」
「おお、すまんなゴブタ。だが問題ないであろう…お客人も満足してもらえているようで何より！！」
リグルドは単純に、己のペニスを締め付けてくる具合の良さから、
エレンの身体は悦んでいると解釈し、なおペースを上げる。

「ひいいいん！！　ま、満足なんてしてないですってぇっ！！
あっあっ、おっふっ、こ、このままだとオマンコ、壊れちゃいますからぁっ！！」
だが嫌よ嫌とも好きの内であると、ゴブタやリグルは、ますますハッスルするリグルドを本気では止めない。
そもそも彼の巨根は、その長さから考えれば子宮の中、なお限界まで押し上げてハマりきっているはずだ。
少なくとも射精しきって萎えるまであと数十回はヤりっぱなしになる事は、
同じゴブリンとして理解しており、自分に番が回ってくるのを悠々と気長に待つといった態度だった。
「ふんんう！！　そろそろ１発まいりますぞー、ぜひとも我が子種、しかと受け取ってくださいっ！！」
「ひいいいいんっ！！　いやですいやぁっ、そんなの絶対ヤですよぉおおっ！！！」
ゴバボッ！！　ドゴンッドゴッゴッドボボオッ！！！
「うびぶっ？！！　うげ…ごっ、おぼぉおぉっ、お、おなか…は、はれつしゅるうぅっ…」
エレンの下腹部が妊娠５カ月目くらいまで膨らんだかと思えば、
白濁物が結合部から飛び散るたびにゆっくりと萎んでゆく。
それだけでも射精量が相当であった事を物語っているが、それがまだ“１発目”であった。
「さぁー、どんどんまいりますぞお客人。たっぷりとご堪能召されい！」
「いーやーーーーーー！！　だ、誰か助けてくださぁいっ！！！」

閉じる

ヂュブルルルルルルッ！　ドヒュルッ！！　ビュフッ！

「うわはははははっ、ようやく勝てたのだ♪　これで１勝１６敗…ここから一気に反撃といくのだ！」
ミリムは顔を赤らめつつも、喜悦にはしゃぐ。
その華奢な腰が上がると、股からはズルリと男根が抜け落ちて、続けてザーメンが溢れ落ちた。
「くっ…ついに負けちまったか…さすが魔王ミリムだ、ストレートってわけにはいかんよな」
フューズはいかにもミリム手ごわし侮り難しといった雰囲気をにじませる。
すると彼女は途端に気を良くした。
「当然なのだっ、勝ち逃げは絶対に許さんぞ、覚悟するのだお前達ぃ♪」
そういってヨウムのチンポにまたがる。そして一気に腰を沈めた。
「くううう！！　こ、こんなに締まりがキツイってのに…さすが魔王…ってワケか」
普通なら、これほどキツい穴ならその本人にも相当に苦痛が生じるはず。
だがミリムは人間ではない。人間の女性の常識は当てはまらない。
最初こそうまい事彼女をノせて騙してセックス勝負に持ち込み、
いいように楽しんでいたフューズ達も、この後どう事を収めたものかと少し冷や汗を流した。

「おお、４回目にしてはまだまだ雄々しいではないかっ！？
良いぞ良いぞ、それでこそ勝負のし甲斐があるというものだ！」
超高速のピストンは、一体秒間にして何度ヨウムの付け根を彼女のマンコ唇が叩いている事か。
それでいて内部ではしっかりと膣壁がうごめいて、ただ擦るだけでなく複雑に刺激する。
すっかりコツを飲み込んだミリムは、自信を持って勝ちにいっていた。
「そらそらどうしたのだー？　もうビクビクしているのだ、２勝目はもう目前のようだなっ」
「く、くそーっ、マジにすげぇ…こ、こんなの分も持たねぇっ！！」
ドグッ！　ビュウッビュルッ！！　ドクンッドクドクルッ！！！　グププッ！
「おお！？　良い射精しっぷりだな！！
安心していくらでも射精するがいい、子を孕んでもちゃんと育ててやるからなっ☆」
「！？　えー、えーと…ミリム様、知っていらしたんで…？」
「わっはっは、愚か者どもめ♪
私はこーみえてお前達よりも遥かに年上なのだぞ？
面白そうだから騙されてやったのだ、最後までしっかりと付き合ってもらうから、覚悟しておけ♪」
そして翌日、フューズ達は干からびてミイラみたいになってるのを、
ギリギリのところで発見されて命を取り留めた。
勝負の最終結果はというと――――１６０勝１６敗。１０倍返しでミリムの圧勝に終わっていた。

閉じる